「日本語特別教育　プログラムB」報告書

中　村　一　郎

1997年度秋学期をもって、日本語特別教育（以下、SJと略す）はSJ-A、SJ-B、SJ-Cという形で、新カリキュラムに移行した。SJ-Bの担当者として、移行によって改善された点を指摘する。つぎに、各学期における留意点を、漢字・語彙・表現、読み方、書き方、新聞の順に指摘する。

1．新カリキュラムで改善された点

新カリキュラム移行により、SJ-Bは格段に改善された。要因は以下の2点である。第1は、秋学期にスタートをすることになったことである。第2は、コース内の学生の日本語能力の差が小さくなったことである。これによって、コースが年間を通した計画をもって、同じ学生たちを指導することができることになった。

SJ-Bは、秋・冬・春の各学期に2単位・週2コマを履修する1年間のコースになった。従来のコースは冬・春（3単位・週3コマ）学期で終わっていた。合計の単位数・コマ数は同じであるが、1年のコースになったことで学生、教師の双方に時間的・心理的ゆとりが生まれ、実際にカバーできることがらが大幅に増えた。

教員にゆとりが生まれた点は、軽視すべきではない。シラバス、教材の蓄積と共有が大きい。これによって、担当者はよりきめ細かく学生の指導にあたることができるようになった。新たな教材の開発にも時間をかけられるようになった。

なお、教材開発に関して付記すれば、個々の教員や各コースの著作権の問題には敏感であるべきである。同時に、互いの仕事を尊重しつつ、共有していける方法を探りつづけることも大切である。

2．コース運営上の留意点

2.1　秋　学　期

秋学期は、SJの最初の学期である。ここでのオリエンテーションは決定的に重要である。ICUに帰国生として入学し、日本語を履修することを要求された学生たちに対し、彼らの「母語」が日本語であること、日本語が「読める」、日本語が「書ける」、その基礎をすでに持っていることを知らせる。日本語に対する恐れを少しずつ取り除いていく。逆に、実際には問題を抱えていながら、自分は日本語は問題ないと思っている学生に対しては、そのことに気づかせなくてはならない。クラス活動としては、漢字・漢字語彙の勉強を中心に据えながらやっていく時期であると考える。

2.1.1　漢字・語彙・表現

漢字・語彙・表現は年間を通じて、『注解　書き取り・読み方テスト』（日栄社）を使用している。毎回2ページづつカバーしていけば、1年間で1冊全部を終えることができる。秋学期には、この教科書の最初から始める。基本的な漢字・語彙である。この段階では、学生たちを全員黒板の前に立たせて、書き取りを行い、筆順なども必要に応じてチェックする。

2.1.2　読　み　方

読み教材は宿題のシートとともに、遅くとも1週間前には学生に渡す。宿題シートは教材の内容をどの程度理解しているか学生が自分で確認し、同時に、読んだことに対する意見や感想を書くためのものである。

クラス活動は、教材に出てくる漢字の読み方の確認、宿題の発表をとおしての内容理解の確認、ディスカッションなどである。

教材は、学期が始まる前の夏に日本で起こった大きな出来事や事件などを扱った新聞記事から始めるのがひとつの方法である。帰国してきた日本に対する関心への導入にもなる。まとまった読み物としては、帰国生に関する著作など、学生たちが身近に感じることができるものを選ぶことが必要である。秋学期の後半には、冬学期の大きな柱となる論文作成を意識して、形式の整った簡潔な論文なども読むようにする。

2.1.3　書　き　方

日本語で文章を書くことに対して持っている違和感を解き、日本語で書くことに自信を持たせるようにする。これは、書き方の1年間全体を通じた目標である。秋学期は、その最初の段階である。助詞は正しく使えているか。ねじれ文になっていないか。句読点はわかりやすく打たれているか。このような基礎的な課題に特に注意をする。まちがえて覚え込んでいる誤字も多く見られる。学生が書く文章のなかにそれを発見し、指摘することも重要な課題である。

2.1.4　新　　聞

SJに移行して以来、SJ-Bでは1年間を通じて、宿題に出している読み教材とは別に、毎時間新聞記事を読んでいる。秋学期の初めに学生に聞いてみると、日本語の新聞を習慣的に読んでいる学生はほとんどいない。読めない、と思っている学生が圧倒的に多い。教員は毎時間、最近の新聞記事の中から学生たちの関心や記事の難易度を勘案し、ひとつの記事を選ぶ。SJ-Bに移行後に可能となったこの新聞読みは、非常に効果が大きいと考えている。

2.2 冬　学　期

冬学期の最大かつ中心的課題は、論文作成である。この点につねに留意しつつ、この学

期全体を運営していく。

2.2.1　漢字・語彙・表現

漢字・語彙・表現に関しては、日常の話し言葉には使われないものも増えてくる。これは、学生がここで始めて触れるという語彙が増えてくるということを意味する。これに対する手当てとして、クラス内でかなり時間はかかるが、その日の分を1語、1語確認していく。クラスで聞いた言葉は記憶に残りやすいと考えてのことである。

2.2.2　読み方・書き方

読み教材も、論文作成の参考になるよう、論文形式のものを多く読む。この際、前年度のSJ-Bの学生が書いた論文を2，3、執筆者の了解を得た上で、この学期の読み教材の一部としても使用している。論文全体の質、構成、引用の仕方、注の入れ方、参考文献表作成、論文の長さ等、学生たちには非常に参考になる。翌年には、あるいは自分が書いた論文が後輩の参考になるかもしれない。この思いは、大きな励みにもなる。これも、SJ-Bの伝統になったと言ってよい。

論文作成に関しては、以下の3点をを特記しておく。

第1は、主題の選び方である。学生は、どうしても大きな題を選んでしまう。論題を絞ること。さらに、それが参考文献を手に入れやすい主題であること。この2点を何度も指摘しているが、実際に徹底させることは相当困難である。分量は6000字～8000字としている。

第2は、「目標規定文」（木下是雄、『レポートの組み立て方』、筑摩書房、1999、pp55-57を参照）の出来・不出来が、論文全体の出来に非常に関係が深いことである。これは、第1の点と直接的にかかわっている。

第3は、初稿提出後の個人指導の重要性である。状況によっては、必要な個人指導の時間を確保するために、学期初めに示したシラバスの変更をしてもよい。ただし、この場合も毎日の漢字クイズだけは最初の予定どおりに行う。

なお、論文作成に関する提出物を、提出順に列挙する。

1）論文の主題　　2）参考文献表　　3）目標規定文及びアウトライン1

4）アウトライン2　　5）初稿　　6）最終稿

2.2.3　新　　聞

冬学期からは、毎週1回は教師が用意し、1回は学生が順番に用意する。当番の学生には、自分がその記事について十分に調べてくることと、その記事を選んだ理由を述べること、クラスでの読後のディスカッションの司会をすることが課せられている。

2.3　春　学　期

SJ-Bの仕上げの学期である。論文作成という困難な課題はすでに乗り越えた。この学

期には、漢字の教科書を続け、読み物を多くし、読んだことについて自由に書く。ジャンルも、学術論文、総合雑誌掲載の論文、随筆、小説などと広がっている。

新聞読みは、冬学期の要領で続ける。このころには、学生たちも日常的に楽しんで新聞を読むようになっているようである。

最後に、現行の漢字教科書の後半に語彙や表現に古いものが散見するが、それらを学習する必要があるのかという、学生と教員の双方からしばしばなされる指摘について、私見を述べておく。現在、あまり使われていない語彙であれば、そのことを説明すればよい。それらの語彙も、読書をすれば出会うこともある。クラスで習った四字熟語などが新聞記事に出てきたりすると、学生たちは目を輝かせている。また、就職試験などに際して要求されることもある。現に、就職活動中のSJ-Bの「修了生」たちから、この教科書を取りだして復習をしているという話しを直接聞くことも少なくない。SJ-Bのレベルにおいては、今後も妥協することなく現行の方針を継続すべきだと考える。